自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発（1）

- 幼児期・小学校低学年：見立てとごっこ -

佐々木幸子[1]・三井若奈[1]・松井由香里[1]・安田祥子[1]#・松本梨沙[1]#・春日彩花[1]#・富井奈菜実[1]#
荒井庸子[2]・中原咲子[3]#・竹内謙彰[4]・荒木穂積[4]
([1]立命館大学大学院応用人間科学研究科・[2]立命館大学大学院社会学研究科
[3]立命館大学人間科学研究所・[4]立命館大学産業社会学部)

【目的】 本研究では、療育における幼児期･小学校低学年期の自閉症スペクトラム児(以下 ASD 児)の見立て遊びとごっこ遊びの出現状況を明らかにし、療育プログラム開発において留意されるべき点を提起することを目的とする。

【方法】

＜対象＞2011 年 7 月から 2012 年 3 月の間、療育プログラムに参加した 5 名を対象とした。対象児の学年および診断時期などの詳細は表 1 に示すとおりである。

表 1　対象児の属性

事例	学年	性別	診断時期	学級・学校
C1	小 2	男児	3:8	特別支援学級
C2	小 1	男児	4:0	通常学級
C3	小 1	男児	7:2	通常学級
C4	年長	男児	3:5	幼稚園
C5	年少	男児	3:2	幼稚園＋療育センター

＜手続き＞療育プログラムは月 1 回､120 分間で構成された。対象児の学年や遊びの段階に依拠しながら、個人の遊びと集団の遊びを考慮した中心的活動を計画し実施された。分析にあたっては、療育プログラムにおける中心的活動である遊び場面(個人と集団)で観察された対象児の行動と発話に着目しエピソードとして取り出した。分析資料には対象児の療育記録、療育場面を撮影したビデオテープを使用した。

【結果と考察】 本研究の結果、他者(大人・子ども)との相互交渉が多くみられた 2 月に着目し分析した結果を表 2 に示す。2 月の中心的活動は「お寿司作り」であった。表 2 にある「見立て遊び」は個人の見立て、「場面共有」は集団での活動、「ごっこ遊び」は集団でのごっこを示している。

表 2　2 月の中心的活動内における対象児の行動

遊びの区分	個人 見立て遊び	集団 場面共有	集団 ごっこ遊び
具体的内容	お寿司作り	酢めし作り	お寿司屋さんごっこ
主な素材・道具	素材(紙粘土､色つき寒天､ビーズなど)	小道具(しゃもじ､うちわ)	大道具(お寿司屋の看板)
対象児の行動	○紙粘土で型抜きをする(C1) ○ビーズを紙粘土にのせる(C5) ☆フェルトを紙粘土にのせてお寿司に見立て食べるまねをする(C5) ○軍艦巻きや握り寿司をつくる(C2,C4) ○赤色の寒天を包丁で切る(他児) ★赤色の寒天を包丁で潰しねぎとろに見立てる(C3)	○しゃもじで酢めしを混ぜながら､うちわであおぐ(C2,C3,他児) →うちわで酢めしをあおぐ(C1)	○大人とお寿司屋さんごっこをする(C4) →C4 のとなりに行き､同じ道具を持ち、様子を見る(C5) ☆大人の介入で､お寿司に値段をつける(C4) ○対象児同士でお寿司屋さんごっこをする(C2,C3) ★お寿司に値段をつけ､お金をもらい､おつりを返す(C3)

注 1) 表中の記号は､○はプログラム上予想された行動、★は偶発的展開 、☆は介入後に見られた行動 、→は模倣的行動を示す。
注 2) 表中の他児は、2012 年 2 月からの参加児童(小 1)である。

研究の結果から、幼児期・小学校低学年の遊びのプログラム開発には最低でも以下の 5 点が重要だと考えられる。

①**テーマ設定**：対象児すべてに共有しやすい生活に身近なテーマを設定する。生活に身近であることで、対象児が興味関心を抱きやすくなると考えられる。

②**個人の遊びのイメージを広げる素材や小道具(見立てから場面共有へ)**：対象児に決まったイメージを与え過ぎないために、自由に変化する素材が必要であると考えられる。また想像力に困難を抱えるとされているため、色や感触を際立たせた素材や小道具を意識的に用意し、目で見ることや手で感じることによりイメージを広げ、見立てを充実させることが重要であると考えられる。さらに見立ての充実は場面共有も促す可能性がある。

③**個人のイメージをつなぐ大道具(場面共有からごっこへ)**：ASD 児は時に、集団で遊ぶことに困難が生じる場合がある。しかし遊びのシンボルとして、等身大の大きさの大道具を用意することにより、場面共有を促しやすくなると考えられる。また、生活に身近なテーマ設定が背景にあるからこそ、役割が意識されやすく、模倣的行動も引き出されやすい。その上で、大道具や役割を媒介とすることで、偶発的な遊びの展開が引き出され、他者との共同によるごっこを促す可能性がある。

④**大人の介入**：ごっこ遊びの始め方や進め方の理解が充分ではない対象児には、大人が積極的に役割を演じて見せること(対等な関係)で、ごっこ遊びが促進されやすくなると考えられる。見立て遊びにおいても、遊び始めるきっかけやイメージの広がりを支える大人の声かけや演示が重要である。

⑤**遊びの発達段階に応じたプログラム設定**：遊びの発達段階が異なるため、対象児のすべてがプログラム内で見立て遊びとごっこ遊びを充分に楽しめるとは限らない。そのため、「見立ての充実に焦点を当てた見立て遊び」と「ごっこの促進に焦点を当てたごっこ遊び」の両方を含み、かつ「それぞれの段階の対象児(個人レベルでは異なることをしていても)が場面を共有すること」の 3 要素を考慮した複線的なプログラム作りが重要である。